

の優越感に無意識にしる追隨するものである。ヨオロッパが今や世界そのものではなくして、他と對立することに於いて存在する特殊の世界であることは嚴然たる事實である。たとひそれが今政治的に内部的對立抗争の状態にあるにしろ、それが依然として、その基底に一の歴史の傳統を共有してゐることは否定出来ない。むしろ歐各國の差異と類似、分裂と統一とは、却つてヨオロッパが一であることを自ら示すものである。ヨオロッパは今や轉生しつゝある、ヨオロッパがドウスン等が云ふ様に果してキリスト教によつてその解體が救済され再建されるか否かについては我々は直ちに賛成出来ない、が然し、ヨオロッパを一の統一體として把握せんとする態度にはたとひそれがカトリックの立場から出たにしろ反對すべき理由を持たない。而も我々が現實に直面せる東亞の事態は、益々この立場を採ることの必要を痛感せしめる、ヨオロッパを斯く把握し、それを歴史的に理解することが我々西洋史學徒の今日よりも先づなすべき課題でなからうか、しかも又そこにこそ眞に我國に於ける西洋史學(ヨオロッパ史學)の樹立の可能性と必要性とを主張しうる根據があるのではなからうか、又かゝる立場をとることによつて、我々は十九世紀以來の、特にランケ以來の史學の遺産を正しく受繼いで行くことが出来るのではなからうか、ドウスンの此の書物は少くともこれらの點に關し、廣く讀まれ、深く考へらるべきものを含んでゐる。(前川貞次郎)

McCarty, Harold Hull. *The Geographic*

basis of American economic life. N. Y. & London. Harper, 1940 p. 702 & 3-75.

東洋新秩序建設に關聯して、これを妨害する合衆國への我が國民の關心が深まり、これに伴つて我が國にても合衆國に關する著作が相次いで發表せられて來た事は誠に喜ぶべき現象である。然しながら、合衆國の大地に即した、基礎的な、ぢみな研究は比較的少ない様に思はれる。一見迂遠な基礎的研究が、合衆國を知り、複雑怪奇の様に見えるその行動と將來とを判斷する上に必要な何物かを提供するのではあるまいか。

本書がこの何物かを提供する最善の著作の一つであると云ふのととりあげたのではない。合衆國の地理を専門に研究する人々よりも、間接、直接合衆國と關係を有する人々、合衆國に對する對策を論じる一般の人々に、合衆國の産業状態に就いては、少くとも此の程度はと云ふ意味で一讀をすゝめ得る、合衆國の經濟地理書であると云ふ意味でとり上げたのである。

本書は元來は中學校用の合衆國經濟地理教科書として作られたものである。従つてその記する所も、著者の批判が加はり、著者の地理觀が明瞭に現はれて居ると云ふ様なものではなくして、最も問題の起らない合衆國の現實の姿の表現である。「地理と經濟」の「地理的環境」の二章を序として、直ちに地方論に入り、合衆國をそれぞれ特徴を有し、性質を異にする(一) Pacific Coast Region (二) Intermountain Plateau Region (三) Rocky Mountain Region (四) Great Plains (五) Northern Lake & Forest Region

(六) Manufacturing Belt (七) Corn Belt (八) Appalachian-Ozark Region (九) Cotton Belt (十) Gulf-Atlantic Coast の十經濟地區に分け、各地域の産業、商業を解説し、その地域の要旨と問題とを附記して居る。各論に重點が置かれ、總括的な記述、殊に合衆國の經濟地理的な制約が他國に及ぼす影響に就いては、ほとんどふれて居ない事は残念である。美くしい寫眞は兎も角として、全段及各章毎に參考とすべき文献をあげ、興味を持つた若き學徒に、次の發展への道標を忘れない態度は、我が國の教科書と比して羨望にたえない。(川上喜代四)

### 近世探檢史

ラヂオ新書第二十二

小牧實繁著

本書は著者が歴次に互りラヂオを通じて全國に講演せられた原稿を、今回、一括上梓せられたもので、「近世探檢史」(昭和十五年四月放送)の外、卷末に附録として、「伊能忠敬先生」(昭和十四年五月放送)及び「蒙疆事情」(昭和十三年十二月放送)なる二篇が添へられてある。

先づ主篇の探檢史に就て見ると――

探檢史に於ては通常、便宜的に十五世紀末のアメリカ發見を以て、近世の始めとするのであるが、「近世探檢」に就て物語る場合には、若干その以前にまで溯つて考察してみることがあるとの潤點から、本書の記述は特に十三世紀の半、マルコ・ポーロ前後の

時代から始められて居る。その後アメリカ發見、アフリカ南端の廻航、マゼランの世界週航を経て十六世紀後半に及んで、歐人の大發見時代なるものは略々終末を告げるとせられる。爾來、地球上の殘餘の地帯が探檢並に科學的調査によつて漸次開明せられて行くのであるが、十八世紀と十九世紀との交、フンボルトのアメリカ探檢旅行の頃を境として、近代の科學的研究旅行が特に活潑に行はれる新時代には入つたものと考へられる。

斯やうな大體の時代的傾向を更に細分し、夫々の地域別に、探檢家の業績に就いて記されてある。文中の人名及び地名には悉く正確な歐文を附記して参照に便し、年代は極めて詳細である。尤大なるべき資料が手際よく纏められてあり、小冊ながら、近世に於ける探檢史の概観を得るによく、要點を知るに便利である。

探檢史は地理學發達史の一部として重視せられる關係上、從來とても地理學專攻者にとつては歐文參考書の如き乏しくはなかつた。併し乍ら此の書の序文には、現下世界史の轉換期に際し、世界を股にかけて出て行くといふ積極的な活力の發揮、正しい國威宣揚の實踐行動に於て、吾が日本の以て他山の石ともなすべきは、今日までの各國の世界進出の先驅をなした探檢の歴史であり、亞細亞にとつては餘り名譽ともならない「近世探檢史」に就て物語るのも實はかゝる考へからであるとの意味が述べられてあり、また本文末には、「徒らに歐羅巴人による世界探檢の歴史を回顧いたし、かゝる、吾々にとつては不名譽極まる歴史を物語りますだけ」が吾々の能であつてはならないのであります。吾々自身が大いに